

南洋の文明のナン

<4>

日本人渡来 真顔で説く

は巨石で屍を生き埋めたという説話を残す倭方の為朝はいかにも巨首遺跡のナンマールにみられる人物と見られる。

為朝は二七〇年から二七六年に死んだといわれるが、ちょうどその間の二七二年(承安元年)に、南の「鬼人」が伊豆に漂着したと古今著聞集にある。その鬼は「かたち身八九尺ばかりにて髪は夜叉のごとく。身のいろ赤黒く眼まやうけて鏡の目の如し。歯はたかなり。身に毛おひす。胸をへたて腰にまたたり」とあり、南洋入りといふ。イタランがナム島を発見する三百五十年前、ミシロ

タメトモ

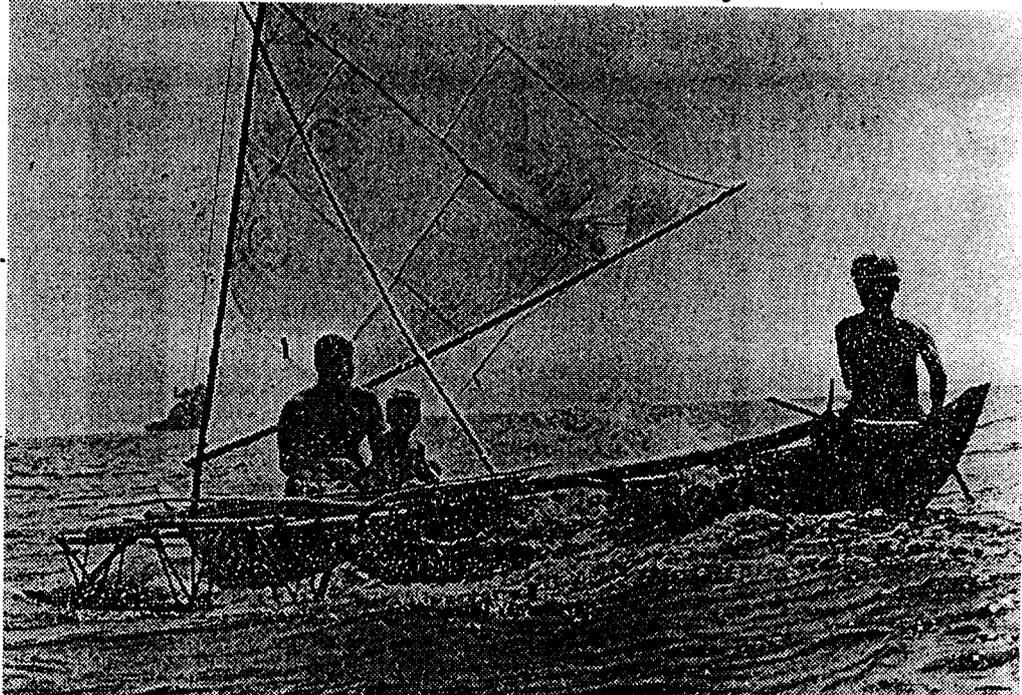
ボナヘ島は東京からの南緯東経三十八度半の海のかなたにある。昔、日本人がはるばるの海を渡ってこの島に海上都市を築いたといふのは、本当だといふか。ナンマールの口を南緯四度、東経一四十二度と推定する。「なせいっ、日本の浦島太郎の通りにこの島が城があるはずありませぬか」「しかし、それ以上のことはいま言えませぬ」

たが、島にはタメトモ伝説があった。瀧沢龍平「機説記」巻月(ちんせつ)の巻(りき)で知られる。あの鎮西八郎為朝である。

から大陸に渡ってツングスタンのなつたといふ海鏡経緯記やタメトモ伝説。

日本に南島人が漂着したたけでなく、日本から南島へ流れ着いた話は数多い。為朝伝説は奄美大島、鹿児島にもあり、沖縄の琉球朝が伊豆を舟遊びしている

き、暴風雨にあつて沖縄まで流され、島の娘との間に琉球王國の祖 舜天王をもうけたといわれる。またナンマールや、その征服者ナンマールの本拠地ミシラ



ボナヘの島民は舟を自動車のように自在に操る。海は無限の自由な道路だ

工島にある巨石の古城、レロ遺跡も、北西方向からの渡来人が築いた、と島の口伝でいふ。ニュージラントの探検家、クリスチャンはかつて「(コララ工島は)タ

サイ島、クジラと呼ばれ、日本の九州がなまったもの」と渡来人日本人説を言い打ち出している。

ナンマールが、約二万五千年前、太平洋の海底に沈んだ、大帝國の王宮といふのは、いまも推定できぬ。スミンニン博物館(米国)の探検は、たゞの測定で、ナンマールが築造されたのは、二五八八年フラスマイナス五〇年ごろと推定したからだ。この限りでは、タメトモ伝説は年代的には矛盾しない。

タメトモを通じて、ナンマールは遠征に身近なものになった。ふりかえってみると、瀬戸内から巨石をイカダに乗せて運び、大阪城を築いた日本人には、南島人と同じ血が流れているようだ。古代史に深い関心を寄せる地球物理学者の竹内均・東大教授は、古く「古代人の航海術は想像以上に優れたものだ。ムラ大陸はなかつたが、太平洋にまたがる、ムラ文明は誰か(と)つとつと」

写真・田代 隆昭
文・池田 知雄
原稿・田代 隆昭

